働く中で感じた大変さや変化はありますか。

幼馴染と一緒に吉本に入り、漫才を始めました。母親は、合わなかったらやめたらいい、経験することが大事なのだからと私の「やってみたい気持ち」をいつも応援してくれました。当時、女性芸人という言葉すらなく、お笑い界は男性社会の時代でした。そんな中でも観客を笑わせて「女に何ができるの?」という空気をひっくり返すのが喜びでしたね。

コンビ解散後は、一度お笑いにまったく関係のない会社員を経験しましたが、やはりお笑いに携わりたいという気持ちが消えず、放送作家に転身しました。その後、平成14年に結婚して、夫の都合で生活の場を東京に移しました。ようやく大阪で仕事が軌道に乗ってきたタイミングだったので、「自分の意思とは関係なく生きる場所を変えるのが女!?」と当時はモヤモヤしましたね。一方で「家事に子育て、仕事…私にはとても無理!」と実感し、仕事をセーブしました。夫も忙しく遠方の実家には頼れない分、たくさんママ友をつくって行政のサービスにもお世話になりました。子育ての交流会などはとても息抜きになったし、気の合うママ友にも出会えました。そして、上の子が小学校に入学するタイミングでママ友の言葉に背中を押してもらい、平成24年、「笑っていいとも!」の作家として復帰しました。

当時のテレビ業界全体の傾向として、企画会議の出席者20～30人のうち女性は一人もいなかったり、いたとしても少数で女性の発言機会は少なく「女性から見てどう?」という質問しか来なかったりすることも…。対等に話せるよう自分なりに勉強しました。会議の時間も遅く帰れないことが当たり前で、男女関係なく労働環境としては厳しいものでした。

今では女性の作家やカメラマンが増え、女性ばかりの現場もあるほどです。労働環境が変わってきて、誰もが意見を言いやすく、休みも取りやすいと感じています。

NSCで講師として指導にあたっていますが、「表現」についてはとても意識しています。世の中も変化してきているので、昔はOKだったことも今ではNGです。ちょっと「ん?」と思う発言があると、お客さんがネタに集中できなくなり、純粋に笑えなくなりますから。加減は難しいですが気をつけています。

家事・育児など家庭で大切にしていることはありますか。

夫婦仲は良い方だと思うのですが、今までで一番揉めたのは家事のことでした。夫の「やっているつもり」のギャップを埋めるために家事をリスト化してみると、夫のしていた家事が148項目中8個しかなかったんです。現実が見えて、夫が細かい家事もしてくれるようになりました。前は「ちょっとやってよ」が言えずにギスギスしてしまい、こどもにもそれが伝わって悪循環でした。家族が仲良く過ごすためにも家事のシェアは重要ですね。「うちのパパ、家事もやるし大好き」って私もこどもほめるんです。パパの地位も向上します。

それから自分をほめることも大切です。できなかったことではなく、できたことに着目して、一日の最後にしっかり自分自身の頑張りも認めるようにしています。

※このインタビューは、令和7年1月29日に行いました。